















き、かつて負性を引き受けていた土地は新たな土地に対して差別者として立ち現れるのである。

このような逆転の構図を「手の家」は繰り返す。一つは宗教間の問題として、もう一つは地域間の問題として。さらに言うならば、先に述べたように、重乃や整子たちが本当に被爆者かどうかを確認する過程において浮かび上がってくるのは、読者自身が持つ被爆者への偏見に満ちた先入観であった。それもまた、読者への大きな逆転の構図である。そして、こうした逆転の構図によって、「手の家」は差別問題へのアプローチを試みると同時に、戦後思想の問題としての原爆小説を模索している。

(長崎文学論3)

注一 新聞記事の中に原爆・原子力問題の表象を探ろうという試みの一つに畑中佳恵「メディアの原子 『(東京)朝日新聞』という言説空間の中で」(上)(中)(下)〔「叙説」19、1999年1月〕「叙説」II-01、2001年1月)がある。本引用も「朝日新聞」の部分は同論文によっている。ただし本稿では大阪版である。

注二 原爆放射能の後遺症の問題は、昭和三〇年時点と、平成一四年の段階で研究の成果が代わっているものも多い。医学については門外漢である筆者が参考としたのは『原爆放射線の人体的影響1992要約版』(放射線被爆者医療国際協力推進協議会編 一九九三年三月 文光堂)である。同書によれば、白血病

や「多くの癌で、線量増加とともに死亡のリスクが大きくなっていく」が、一方において「原爆放射線による統計学的に有意な遺伝的影響は認められ」ていない。だが、もちろんこうした結論は「今日までの調査研究に基づくもので」、「将来の研究などによって修正される部分もあり得る」。

注三 「私はなぜ小説を書くか ―朝日ジャーナル五周年記念公演―」(「朝日ジャーナル」一九六四年五月三一日)

注四 宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』(東京大学出版会 一九九六年一月)。なお、同書によれば、明治以降のカクレキリシタンは江戸期の潜伏キリシタンと違い、別に「隠れ」ているわけではない。よって表記も表意文字である漢字を用いず、カタカナで「カクレキリシタン」とすべきであるという。

注五 注四に同じ。

注六 森崎和江『からゆきさん』(一九七六年五月 朝日新聞社)によれば、長崎市内出身の「からゆきさん」も、数多く存在しており必ずしも問題は単純ではない。また、彼女らに対する周囲の視線も、初期においては必ずしも差別的であるとは限らない部分もある。

付記 本稿は二〇〇二年六月二九日、九州大学六本松地区において行われた第三回原爆文学研究会での研究発表をもとにして行っている。当日の質疑応答、並びに懇親会で種々のご教示を頂きました。改めてお礼申し上げます。